

保幼小の接続と音楽教育の変遷

— 保育所保育指針と幼稚園教育要領・小学校学習指導要領の比較から —

四童子 裕¹⁾

The transition of music education and cooperation between
nursery schools, kindergartens, and elementary schools
— Focusing on childcare guidelines and the course of study
(for kindergartens and elementary schools)

Yu Shidoji

1. はじめに

1990年代後半に小学校低学年での「学級崩壊」問題や「小1プロブレム」問題が社会的な問題となって以降、幼稚園と小学校の連携、また保育所（園）と小学校の連携が政策レベルで行われるようになり、小学校学習指導要領（以下、学習指導要領）や幼稚園教育要領（以下、教育要領）、保育所保育指針（以下、保育指針）でも連携の重要性について触れられてきた。平成29年度に改訂された学習指導要領では「幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう」示され、教育要領や保育指針では小学校就学時の具体的な姿として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されるなど、近年益々、保幼小の接続について具体的に明示されるようになっていく。

音楽教育における保幼小連携について、三村ら（2004）¹⁾が保幼小の音楽教育に対する意識調査を行い、連携を妨げている問題を明らかにした。岡林・難波ら（2014～2017）^{2,3,4,5)}は、さまざまな連続性を持ったプログラムを実践しながら、具体的な方法を示している。その他様々な研究が行われているが、依然確固としたカリキュラムはなく、カリキュラムの開発が重要視されている。こうした状況において、これまでの学習指導要領や教育要領、保育指針においてどのように音楽的な能力の育成を目指してきたのか、またどのように保幼小の連携を図っていたのか変遷を探ることは、今日の円滑な接続の方法や今後の保幼小連携の在り方を考えるうえで、何らかの示唆を得ることができるのではないかと考える。

筆者はこれまでに、戦後の教育要領と学習指導要領において、幼小の接続がどのように捉えられてきたのかを探った。その中では、①昭和期の教育要領では、幼稚園での教育と小学校の教育には一貫した目的と方法が必要だという考え方が示されていたこと、②平成10年度以降は教育要領と学習指導要領の双方で、幼小の連携や円滑な接続への記述が増加していたこと、③昭和26年度学習指導要領（試案）で幼小の系統的な目標や指導内容が示された後の教育要領（昭和31年度・昭和39年度）において、幼稚園での教育と小学校以降の教育が性格を異にすることが明示されていたこと、などが明らかになった。音楽教育に関連する内容と比較すると、①については同様に一貫した指導目標や指導内容が見られるが、②や③についてはそうした特徴が見られず、特に③の幼小での教育が性格を異にすることが示された期間においても、教育要領の内容が学習指導要領の各領域の内容と関連していたり、具体的な音楽活動について共通の記述が見られたりしていた。

本研究では、教育要領と学習指導要領の比較で見られたこうした特徴が、保育指針においても同様に見られるのかを明らかにすることを目的とする。学習指導要領・教育要領・保育指針における保幼小連携の記述から、音楽科と領域「表現」について考察している研究としては、小林（2018）⁶⁾があるが、昭和～平成初期の期間については触れられていない。初めて制定された昭和40年から現在までの全ての保育指針をもとに、保・幼・小の接続がどのように捉えられてきたのか、音楽教育の目標や内容とどのように関連・変化してきたのか、その変遷を探っていく。

執筆者紹介：¹⁾ 中村学園大学短期大学部幼児保育学科

別刷請求先：四童子裕 〒814-0198 福岡市城南区別府 5-7-1 shidoji@nakamura-u.ac.jp

年	保育所保育指針 〔昭和40年：4～6歳、 平成2年～：3歳以上児の領域〕	幼稚園教育要領 〔領域〕	小学校学習指導要領 〔領域〕	概要
昭和22年			小学校学習指導要領(試案) 〔歌唱・器楽・鑑賞・創作〕	「実際に生活に即した」教育を重視
昭和23年		保育要領―幼児教育の手びき―(試案)		幼稚園、保育所、家庭における幼児教育の手引き 幼児の保育内容―楽しい幼児の経験―12項目提示
昭和26年			小学校学習指導要領(試案)【改訂1】 〔歌唱・器楽・鑑賞・創造的表現・リズム反応〕	経験主義の思考論・教育論が重視
昭和31年		幼稚園教育要領 〔健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画製作〕		保育内容が6領域に分類整理される 小学校以上の教科との違いを明記、小学校と内容一貫性を図る
昭和33年			小学校学習指導要領【改訂2】 〔表現(歌唱・器楽・創作)・鑑賞〕	学習指導要領の「公示」、系統的な学習を重視 道徳教育の徹底、基礎学力の充実、科学技術教育の向上
昭和39年 昭和40年	保育所保育指針 〔健康・社会・言語・自然・音楽・造形〕	幼稚園教育要領【改訂1】 〔健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画製作〕		教育要領の「公示」、教育課程の基準として確立 (保)保育所保育指針の策定
昭和43年			小学校学習指導要領【改訂3】 〔基礎・鑑賞・歌唱・器楽・創作〕	基礎的な知識・理解・技能の習得 高度経済成長や工業化を推進する人的能力の開発を目指す
昭和52年			小学校学習指導要領【改訂4】 〔表現・鑑賞〕	知・徳・体の調和のとれた豊かな人間性の育成をめざす 授業時間数の削減、「ゆとり」の時間設定
平成元年 平成2年	保育所保育指針【改訂1】 〔健康・人間関係・環境・言葉・表現〕	幼稚園教育要領【改訂2】 〔健康・人間関係・環境・言葉・表現〕	小学校学習指導要領【改訂5】 〔表現・鑑賞〕	関心・意欲・主体性などの質的学力観が強調、「生活科」新設 保育内容が5領域に分類される (保)幼稚園教育要領の教育内容との整合性へ配慮
平成10年 平成11年	保育所保育指針【改訂2】 〔健康・人間関係・環境・言葉・表現〕	幼稚園教育要領【改訂3】 〔健康・人間関係・環境・言葉・表現〕	小学校学習指導要領【改訂6】 〔表現・鑑賞〕	自ら学び、自ら考える力などの「生きる力」の育成をめざす 「総合的な学習の時間」新設、体験学習や問題解決能力を重視
平成20年	保育所保育指針【改訂3】 〔健康・人間関係・環境・言葉・表現〕	幼稚園教育要領【改訂4】 〔健康・人間関係・環境・言葉・表現〕	小学校学習指導要領【改訂7】 〔表現・鑑賞〕	「生きる力」の理念を継承し、確かな学力の育成をめざす 授業時間数増加、小学校外外国語活動の導入、幼小連携の推進 (保)保育指針の「告示」
平成29年	保育所保育指針【改訂4】 〔健康・人間関係・環境・言葉・表現〕	幼稚園教育要領【改訂5】 〔健康・人間関係・環境・言葉・表現〕	小学校学習指導要領【改訂8】 〔表現・鑑賞〕	資質・能力の3つの柱に基づく学び 主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニング)の重視

【表1 保育指針・教育要領・学習指導要領の変遷】

2. 保育指針から見る保・幼・小の連携

(1) 保育指針と教育要領の関連

a) 昭和40年度保育指針

保育所保育指針が策定される前年に、「いま保育所に必要なもの」(中央児童福祉審議会保育制度特別部会 第2次中間報告)内で、「乳児から就学にいたるまでの幼児が保育の対象であるから、その年令的発達特質をよくとらえ、かつ、一貫性をもった保育内容とその編成が行なわれることが必要であり、3歳以上の保育内容と編成については、「保育所の特質を十分にとらえながら幼稚園教育要領との関連をも配慮しつつ、全体の適正な保育計画が行なわれることが必要である」⁷と示されており、保育指針は初期から教育要領との関連性をもたせるよう考えられていたことが分かる。

b) 平成2年度保育指針

保育所保育指針解説の「保育所保育指針」改訂の趣旨と経緯の中の「第3節『保育指針』の改定を検討する際の視点」の(4)に、「3歳以上の子どもの教育内容については、それぞれの保育形態などにより相違はあるとしても、幼児教育の観点から両者の特性等を踏まえつつ共通的なものにすることが望ましいとされている」と示され、保育所における教育的な内容については、「『幼稚園教育要領』の教育内容との整合性も配慮する必要がある」⁸と示されている。昭和40年度の保育指針と同じく、教育要領との関連性をもたせるよう考えられていたことが分かる。

c) 平成11年度保育指針

「保育所保育指針検討小委員会小委員長のことば」の中で、「3歳以上児の保育に関しては、すでに改訂されている幼稚園の教育要領との整合性を図った」⁹と示されている。また、「保育所保育指針改訂の視点と基本的考え方」の「2 保育ニーズ等に対応する保育所保育指針の改訂」「(2) 保育指針の改訂の必要性」では、「平成10年12月に新しい幼稚園教育要領が告示された」ことに触れ、「昭和38年10月28日に文部省初等中等教育局長と厚生省児童局長の連名通知により、保育所保育における3歳以上児の教育内容については、幼稚園教育要領に準ずることが望まし」く、「配慮することになっている」ため、「改訂された幼稚園教育要領とできる限り整合性を図る必要がある」¹⁰ことが示されている。

d) 平成20年度保育指針

厚生労働大臣から告示されるようになった平成20年度の保育指針でも、『保育所保育指針解説』の「序章」で、「根拠法令、関連法令や幼稚園教育要領などとの整合性がこれまで以上に図られている」¹¹ことが改訂の特徴として挙げられている。

e) 平成29年度保育指針

『保育所保育指針解説』の「序章」の「4 改定の方角性」「(2) 保育所保育における幼児教育の積極的な位置づけ」内で、「幼保連携型認定こども園や幼稚園と共に、幼児教育の一翼を担う施設として、教育に関わる側面のねらい及び内容に関して、幼保連携型認定こども園教育・保育要領及び幼稚園教育要領との更なる整合性を図った」¹²こ

とが示された。

(2) 保育指針からみる小学校との連携

a) 昭和 40 年度保育指針

「第 1 章 総則」で「第 9 章には、小学校に進学する時までに指導することの望ましい事項が示されている」と示され、「第 9 章 6 歳児の保育内容」で示される内容が小学校入学時までに育って欲しい姿として挙げられている。その他にも、同 9 章内の「4. 指導上の留意事項」(2)で「入学への楽しみをじゅうぶんにもたせるようにするとともに、小学校の教育との関連を考慮すること」と示されている。

b) 平成 2 年度保育指針

「第 11 章 保育の計画作成上の留意事項」(10)で「小学校との関係については、子どもの連続的な発達などを考慮して、互いに理解を深めるようにするとともに、子どもが入学に向かって期待感を持ち、自信と積極性を持って生活できるように指導計画の作成に当たってもこの点に配慮すること」と述べられるに留まった。

c) 平成 11 年度保育指針

「第 1 章 総則」1. 保育の原理」内「(2) 保育の内容」のイで、「子どもの発達について理解し、子ども一人一人の特性に応じ、生きる喜びと困難な状況への対処する力を育てることを基本とし、発達の課題に配慮して保育すること」と示され、「生きる力の基礎」を育てるよう記された。その他、「第 11 章 保育の計画作成上の留意事項」(8)に、平成 2 年度保育指針と同様の記述が見られる。

d) 平成 20 年度保育指針

「第 2 章 子どもの発達」の「1 乳幼児期の発達の特性」(6)で、「乳幼児期は、生涯にわたる生きる力の基礎が培われる時期」であることが示された。「第 3 章 保育の内容」の「2 保育の実施上の配慮事項」、「(4) 3 歳以上児の保育に関わる配慮事項」では、「ケ 保育所の保育が、小学校以降の生活や学校の基礎の育成につながることに留意し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること」と示された。また、「第 4 章 保育の計画及び評価」の「1 保育の計画」の「(3) 指導計画の作成上、特に留意すべき事項」内「エ 小学校との連携」に、「(ア) 子どもの生活や発達の連続性を踏まえ、保育の内容の工夫を図るとともに、就学に向けて、保育所の子どもと小学校の児童との交流、職員同士の交流、情報共有や相互理解など小学校との積極的な連携を図るように配慮すること」や「(イ) 子どもに関する情報共有に関して、保育所に入所している子どもの就学に際して「子どもの育ちを支えるための資料が保育所から小学校へ送付されるようにすること」と示され、小学校との接続・連携について、具体的な方策が記された。

e) 平成 29 年度保育指針

「第 1 章 総則」の「4 幼児教育を行う施設として共有すべき事項」の「(1) 育みたい資質・能力」として、「生

涯にわたる生きる力の基礎を培うため」に、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力を「一体的に育むよう努める」よう示された。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として 10 項目を挙げたうえで、示した「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、「小学校就学時の具体的な姿」であることが記された。このことは「第 2 章 保育の内容」の「3 3 歳以上児の保育に関するねらい及び内容」の「(3) 保育の実施に関わる配慮事項」でも同様に記されている。同章「4 保育の実施に関して留意すべき事項」の「(2) 小学校との連携」では、「ア 保育所においては、保育所保育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通じて、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること」や「イ 保育所保育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、第 1 章の 4 の(2)に示す「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を共有するなど連携を図り、保育所保育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めること」、「ウ 子どもに関する情報共有に関して、保育所に入所している子どもの就学に際し、市町村の支援の下に、子どもの育ちを支えるための資料が保育所から小学校へ送付されるようにすること」の 3 点が示され、平成 20 年度保育指針よりも更に小学校との連携についての記述が増えていることが分かる。

(3) 保育指針と教育要領の記述の比較

昭和 40 年度・平成 2 年度・平成 11 年度・平成 20 年度・平成 29 年度の 5 つの保育指針を見てみると、すべての保育指針で、教育要領との関連性・整合性を持たせるよう記されていることが分かる。

小学校との連携に関する記述を見ていくと、昭和 40 年度では「6 歳児の保育内容」で示されている内容が、小学校に進学する時までに指導することの望ましい事項として明示されている。その他、昭和 40 年度・平成 2 年度・平成 11 年度では「小学校入学への期待感」をもたせることについて同様の記述が見られ、また、平成 11 年度以降は「生きる力の基礎」を育てることが継続して記述されていることが見て取れる。平成 20 年度以降からは、保育所の子どもと小学校の児童との交流や職員同士の交流を行ったり、保育所から小学校へ資料を送付したりするように記されるなど、保・小の連携について具体的な方法が記されるようになっていく。平成 29 年度では、小学校就学時の具体的な姿として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されるなど、平成 11 年度以降は保・小の連携、円滑な接続への意識の高まりが感じられる。

教育要領にみられる小学校との連携に関する記述は、【表 2】の通りである。昭和 39 年度の「小学校へ進学する期待や心構え」や、平成 10 年度以降の「生きる力の基

年	小学校との関連・連携に関する記述
昭和 23 年	<ul style="list-style-type: none"> ・保育所や幼稚園の幼児たちは、その教育の効果をもって小学校に入学する。したがって小学校とあらかじめよく連絡をとることも、また欠くことのできないことである。特に低学年の先生と密接な連絡をとることが必要である。 ・就学前の教育と、就学後の教育とは、ともに一貫した目的と方法を持たなければならない。
昭和 31 年	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園の保育内容について、小学校との一貫性を持たせるようにした ・幼稚園の教育が小学校の教育と連絡を図るためには、幼稚園の教師は、特に小学校低学年の教育課程を理解する必要がある。それと同時に、小学校、なかでも低学年の教師が、幼稚園の指導計画を理解してくれるよう望む必要がある。関連を密にするためには、近接の幼稚園と小学校の教師が合同の研究協議会を開くとか、教育委員会が中心になって、両者の関連を考慮した指導計画を研究するというようなことが有効である。 ・ここに注意しなければならないことは、(中略)小学校以上の学校における教科とは、その性格を大いに異にすることである。幼稚園の時代は、まだ、教科というようなわけで学習させる段階ではない。むしろこどものしぜんな生活指導の姿で、(中略)ねらう内容を身につけさせようとするのである。したがって、小学校の教科指導の計画や方法を、そのまま幼稚園に適用しようとしたら、幼児の教育を誤る結果となる。 ・幼稚園の指導計画ということについては、ときとしてかなり懐疑的な考えを持たれることがある。それは、幼稚園の教育が、小学校や中学校のように、はっきり教科を設けて系統的に学習させるやり方とは違い、全体的、未分化的に生活を指導する形で行わなければならないという理由に基くことが多いようである。しかし、総合的な指導には、計画がいらないとは言われない。それどころか、分化的、専門的にははっきりした順序系統で指導するときよりも、いっそう計画が必要だと言えよう。
昭和 39 年	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園教育は小学校教育と異なるものがあることに留意し、その特質を生かして、適切な指導を行うようにすること。 ・幼稚園教育の特質に基づき、各領域は小学校における各教科とその性格が異なるものであることに留意しなければならない。 ・幼稚園修了前の幼児については、小学校へ進学する期待や心構えなどを育てるように配慮すること。
平成元年	<ul style="list-style-type: none"> ・文字に関する系統的な指導は小学校から行われるものであるので、幼稚園においては直接取り上げて指導するのではなく個々の幼児の文字に対する興味や関心、感覚が無理なく養われるようにすること。
平成 10 年	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児期における教育は、家庭との連携を図りながら、生涯にわたる人間形成の基礎を培うために大切なものであり、幼稚園は、幼稚園教育の基本に基づいて展開される幼稚園生活を通して、生きる力の基礎を育成するよう学校教育法第 78 条に規定する幼稚園教育の目標の達成に努めなければならない。 ・この章(第 2 章 ねらい及び内容)に示すねらいは幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度などであり、内容はねらいを達成するために指導する事項である。 ・幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること
平成 20 年	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園は、家庭との連携を図りながら、この章(第 1 章 総則)の第 1(幼稚園教育の基本)に示す幼稚園教育の基本に基づいて展開される幼稚園生活を通して、生きる力の基礎を育成するよう学校教育法第 23 条に規定する幼稚園教育の目標の達成に努めなければならない。幼稚園は、このことにより、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとする。 ・この章(第 2 章 ねらい及び内容)に示すねらいは、幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度などであり、内容は、ねらいを達成するために指導する事項である。 ・幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること。 ・幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図るようにすること。
平成 29 年	<ul style="list-style-type: none"> ・これからの幼稚園には、学校教育の始まりとして、(中略)持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる。 ・家庭との緊密な連携の下、小学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら、幼児の自発的な活動としての遊びを通しての総合的な指導をする際に広く活用されるものになることを期待して、ここに幼稚園教育要領を定める。 ・幼稚園においては、生きる力の基礎を育むため、この章(第 1 章 総則)の第 1(幼稚園教育の基本)に示す幼稚園教育の基本を踏まえ、次に掲げる資質・能力を一体的に育むよう努めるものとする。 → (1)「知識及び技能の基礎」(2) 思考力、判断力、表現力等の基礎、(3) 学びに向かう力、人間性 ・幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること。 ・幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。 ・評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取り組みを推進するとともに、次年度又は小学校等にその内容が適切に引き継がれるようにすること。 ・幼稚園間に加え、保育所、幼保連携型認定こども園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校などとの間の連携や交流を図るものとする。特に、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続のため、幼稚園の幼児と小学校の児童との交流の機会を積極的に設けるようにするものとする。

【表 2 幼稚園教育要領にみられる小学校との連携】

礎」に関する記述には同様の文面が見られる。

幼小の接続がどのように捉えられてきたのかを探った際

前述した通り、戦後の教育要領と学習指導要領において、 には、①昭和期の教育要領では、幼稚園での教育と小学校

の教育には一貫した目的と方法が必要だという考え方が示されていたこと、②平成10年度以降は教育要領と学習指導要領の双方で、幼小の連携や円滑な接続への記述が増加していたこと、③昭和26年度学習指導要領（試案）で幼小の系統的な目標や指導内容が示された後の教育要領（昭和31年度・昭和39年度）において、幼稚園での教育と小学校以降の教育が性格を異にすることが明示されていたこと、などが明らかになった。保育指針と照らし合わせてみると、①について、「保育所と小学校で一貫した目的・方法が必要だ」といった記述は昭和40年度の指針では見られないことから、保育指針では該当しない（昭和39年度の教育要領でも記載はないため、整合性は図られている）。また、③についても、同時期の保育指針（昭和40年度）を確認しても、「小学校の教育と性格を異にする」といった記述は見られないため該当しない。②については保育指針も同様であり、平成10年度以降、保・幼・小の全てで連携への意識が高まっていることがうかがえた。

3. 保育指針と教育要領・学習指導要領（低学年）の音楽に関する内容の比較

ここでは保育指針と教育要領内に示された音楽に関する内容と、学習指導要領（第1学年及び低学年）音楽科編に示された内容の比較を行い、それぞれでどのような音楽能力の育成を目指していたのかを明らかにしていく。

教育要領と学習指導要領を比較した際には、昭和43年度学習指導要領改訂までの期間では、学習指導要領に示された目標や内容と関連する内容が教育要領でも数多く見られていたが、昭和52年度の学習指導要領改訂以後は、共通した内容や文言が非常に少なくなることが明らかになったこと、平成元年度に教育要領で音楽の内容が領域「表現」で示されるようになってからは、具体的な音楽活動についてほとんど示されなかったため、平成元年度を含めた平成時代の改訂においては、感性や情操を養うといった教育目標以外の項目では、共通した内容がほとんど見られなくなったことが明らかとなった。そのため、今回は(1)昭和40年度保育指針とその前後の教育要領・学習指導要領の比較と、(2)昭和52年度以降の保育指針・教育要領・学習指導要領の比較の2点について分析を行う。

(1) 昭和40年度保育指針とその前後の教育要領・学習指導要領の比較

昭和39年度教育要領と、昭和33年度・43年度学習指導要領を比較した結果は以下の通りである。

幼稚園	小学校
●幼稚園の内容と小学校の領域に関連がみられる (幼：1が歌唱・器楽、3が鑑賞、4が創作と関連)	
1 のびのびと歌ったり、楽器をひいたりして表現の喜びを味わう。	・領域 A 鑑賞 B 表現
3 音楽に親しみ、聞くことに興味をもつ。	(歌唱・器楽・創作)

4 感じたこと、考えたことなどを音や動きに表現しようとする。	
●「身体反応」や「身体表現」に関連した文言がみられる	
・のびのびと動きのリズムを楽しむ、表現の喜びを味わう。 ・曲に合わせて歩いたり、走ったり、とんだりなどする。 ・感じたこと、考えたことなどを音や動きに表現しようとする。 ・感じたこと、考えたことを、自由にからだで表現する。 ・感じたこと考えたことをくふうして歌や楽器やからだで表現する	A 鑑賞 (3) イ ・身体反応（遊び）を通して、フレーズを感じとる。 B 表現【歌唱】(1) エ ・自由な身体表現をしながら歌う。 表現【創作】 ・音楽に合わせて創造的に身体表現をする。
●歌唱、器楽、鑑賞の各領域と共通した文言がみられる	
・みんなといっしょに喜んで歌い、ひとりでも歌える ・はっきりしたことばで音程やリズムに気をつけて歌う	B 表現【歌唱】(1) イ みんなといっしょに歌う ウ ひたひたで歌う (2) ウ はっきりした発音で歌う A 鑑賞(2) ア 先生や友だちの歌や演奏を静かに聞く イ 放送やレコードなどの音楽を静かに聞く
・静かに音楽を聞く ・友だちの歌や演奏などを聞く	

【表3 昭和39年度教育要領と昭和33年度学習指導要領（第1学年音楽科）比較 共通点】

幼稚園	小学校
●幼稚園の内容と小学校の領域に関連がみられる (幼：1が歌唱・器楽、3が鑑賞、4が創作と関連)	
1 のびのびと歌ったり、楽器をひいたりして表現の喜びを味わう。 3 音楽に親しみ、聞くことに興味をもつ 4 感じたこと、考えたことなどを音や動きに表現しようとする。	・領域 A 基礎 B 鑑賞 C 歌唱 D 器楽 E 創作
●基礎の内容について関連がみられる	
留意点 ア 幼児の年齢や発達の程度に応じて無理のないように、のびのびと楽しんで歌ったり、楽器をひいたりさせ、しだいに音楽についての基礎的な技能や感覚を養うようにすること。(中略) また、楽器の指導については、リズム楽器を主体として楽器を自由にひかせ、それらの楽器に親しませ、しだいに幼児の年齢や発達の程度に応じて、基礎的なひき方の指導を加えたり、可能な場合には簡易な分伴奏をさせたりすること。	目標 ・歌唱および器楽の基礎的な技能を養う。 ・即興的に音楽表現しようとする意欲を育てるとともに、そのための基礎的な技能を養う。 C 歌唱 歌唱の基礎的な技能を育てる。 D 器楽 器楽の基礎的な技能を育てる。 E 創作 即興的に音楽表現しようとする意欲と基礎的な技能を育てる。
●器楽についての共通した文言がみられる	
・曲の速度や強弱に気をつけて楽器をひく	D 器楽 (2) ア ・打楽器を、その曲にふさわしい速さと強さに気づいて打つこと。

【表4 昭和39年度教育要領と昭和43年度学習指導要領（第1学年音楽科）比較 共通点】

昭和40年度保育指針の領域「音楽」で示された内容と、昭和33年度学習指導要領を比較してみると、同時期の教

保育所保育指針 領域「音楽」他（昭和40年度）	小学校学習指導要領（音楽科編）（昭和33年度）
<p>6 歳児の保育内容</p> <p>1 発達上のおもな特徴</p> <p>(9) 創造的な表現活動がさかんととなり、自分や友だちのいろいろの表現したもののよさがわかるようになる。</p> <p>2 保育のねらい</p> <p>(10) 音楽に親しむ機会を豊かに与え、美しさを感じたり、感じた通りに自由に表現できる力を養う。</p> <p>3 望ましいおもな活動</p> <p>領域「健康」内「運動」</p> <p>(6) 音楽に合わせて、リズムカルに運動する。</p> <p>領域「音楽」</p> <p>(1) みんなといっしょに、静かな音楽を聞く。</p> <p>(2) 友だちの歌や演奏やリズムカルな動きを楽しむ。</p> <p>(3) 自然な声、はっきりしたことばで音程やリズムに気をつけて歌う。</p> <p>(4) 歌や曲を身体の動きで表現する。</p> <p>(5) 曲の速度や強弱に気をつけて楽器をひく。</p> <p>(6) 感じたこと、考えたことを、自由に身体や楽器で表現する。</p> <p>(7) 音や曲の感じがわかる。</p> <p>(8) リズムカルな集団遊びを楽しむ。</p> <p>(9) いろいろのすぐれた音楽に親しむ。</p> <p>4 指導上の留意事項</p> <p>(2) 入学への楽しみをじゅうぶんにもたせるようにするとともに、小学校の教育との関連を考慮すること</p> <p>(8) 表現活動の指導にあたっては、子どもの表現しようとする意欲を育て、うちから生み出されたものを受け入れてやり満足感と自信をもたせるよう留意すること。</p> <p>(9) 保育の言動は、子どもが美しいものを感じたり、よいものを選んだりすることに強い影響を及ぼすものであることに留意すること。</p>	<p>教育目標</p> <p>1 音楽経験を豊かにし、音楽的感觉の発達を図るとともに、美的情操を養う。</p> <p>2 すぐれた音楽に数多く親しませ、よい音楽を愛好する心情を育て、音楽の美しさを味わって聞く態度や能力を養う。</p> <p>3 歌を歌うこと、楽器を演奏すること、簡単な旋律を作ることなどの音楽表現に必要な技能の習熟を図り、音楽による創造的表現の能力を伸ばす。</p> <p>4 音楽経験を豊かにするために必要な音楽に関する知識を、鑑賞や表現の音楽活動を通して理解させる。</p> <p>5 音楽経験を通して、日常生活にうまいや豊かさをもたらす態度や習慣を養う。</p> <p>1. 目標 【第1学年】</p> <p>(1)音楽を聞くことに興味をもたせ、身体反応を伴った鑑賞活動を通して、音楽的感觉の芽ばえを伸ばす。</p> <p>(2)聴唱法による歌い方に慣れさせ、基礎的な歌唱技能を身につけさせる。</p> <p>(3)身体の動きを通したリズム表現や、リズム唱、階名唱などの活動を通し、感覚的な面から読譜能力の素地を養う。</p> <p>(4)リズム楽器の奏法に慣れさせるとともに旋律楽器にも親しませ、リズム楽器による基礎的な合奏技能を身につけさせる。</p> <p>(5)即興的に音楽表現をすることに興味をもたせ、創造的に表現する能力の素地を養う。</p> <p>(6)愛好曲を身につけさせ、明るく楽しい学校生活ができるようにする。</p> <p>2. 内容 【第1学年】 抜粋</p> <p>A 鑑賞</p> <p>(1)楽しく聞く態度を養う。</p> <p>ア 自由に身体反応をしながら聞く。</p> <p>イ 明るくリズムカルな音楽を聞く。</p> <p>ウ 描写音楽を、場面や情景を想像しながら聞く。</p> <p>エ 聞いた歌や音楽の主題を口ずさむ。</p> <p>(2)静かに聞く習慣を養う。</p> <p>ア 先生や友だちの歌や演奏を静かに聞く。</p> <p>イ 放送やレコードなどの音楽を静かに聞く。</p> <p>(3)音楽的感觉の芽ばえを伸ばす。</p> <p>ア 二拍子および三拍子を感じとる。</p> <p>イ 身体反応(遊び)を通して、フレーズを感じとる。</p> <p>ウ 音楽を聞いて、和声の美しさを実感的につかむ。</p> <p>(4)楽器の特徴を理解させ、その楽器のもつ特有の音色を聞き分ける能力を養う。</p> <p>ア リズム楽器類(木琴を含む。)、ラッパ類、バイオリンおよびけん盤楽器の音色に親しむ。</p> <p>(5)演奏形態について理解させる。</p> <p>ア ひとりで演奏すること(独唱や独奏)と大ぜいで演奏すること(せい唱や合奏)の違いに気をつけて聞く。</p> <p>(6)愛好曲をもたせる。(略)</p> <p>B 表現</p> <p>【歌唱】</p> <p>(1)楽しく歌う態度を養う。</p> <p>ア 聴唱法で歌う。</p> <p>イ みんなといっしょに歌う。</p> <p>ウ ひとりで歌う。</p> <p>エ 自由な身体表現をしながら歌う。</p> <p>オ 歌詞の内容を理解し、気持ちをこめて歌う。</p> <p>(2)基礎的な歌唱技能を身につけさせる。</p> <p>ア よい姿勢で歌う。</p> <p>イ どのようなで歌う。</p> <p>ウ はっきりした発音で歌う。</p> <p>エ その曲を最も美しく表現できる速さと強さで歌う。</p> <p>オ リズムや音程を正しく歌う。</p> <p>カ 伴奏を聞きながら歌う。</p> <p>キ 歌い出し、息つき、フレーズのくぎり方および歌い終りを正しく歌う。</p> <p>(3)読譜の基礎能力を養う。</p> <p>ア リズム唱、リズム打および拍子打に慣れる。</p> <p>イ 簡単な旋律の階名模唱をする。</p> <p>ウ 習った歌をなるべく多く階名暗唱する。</p> <p>エ 絵譜を見ながら歌詞や階名で歌う。</p> <p>(4)愛唱歌を身につけさせる。</p> <p>ア 習った歌をそらで歌う。</p> <p>イ 次の各項に該当する歌曲を、(カ)に示す3曲を含め、聴唱によって年間最低 17 曲歌う。</p> <p>(ア)曲態は単音の歌曲。</p> <p>(イ)調は長調、短調および日本旋法のもの。</p> <p>(ウ)拍子では、リズムの単純なもの。</p> <p>(オ)歌詞は口語体で平易なもの。</p> <p>(カ)文部省著作の「かたつむり」「月」「日の丸」</p> <p>【器楽】</p> <p>(1)楽しく演奏する態度を養う。</p> <p>ア 歌ったり聞いたりしながら、手を打ったりリズム楽器を打ったりする。</p> <p>イ リズム遊びをしながらリズム楽器を打つ。*</p>

【表5 昭和40年度保育指針と昭和33年度学習指導要領（第1学年音楽科）比較 共通点】

育要領と学習指導要領の場合と同様に、領域「音楽」の保育内容に「歌唱」「器楽」「鑑賞」「創作」と関連する内容が見られる。また、「身体反応」や「身体表現」に関連し

た内容が双方に見られる（表5 網掛部）。歌唱や器楽にしても、わずかではあるが共通した内容を見ることができ（表5 傍線部）。昭和40年度保育指針と、昭和43年度

保育所保育指針 領域「音楽」他（昭和40年度）	小学校学習指導要領（音楽科編）（昭和43年度）
<p>6歳児の保育内容</p> <p>1 発達上のおもな特徴</p> <p>(9) 創造的な表現活動がさかんととなり、自分や友だちのいろいろの表現したもののよさがわかるようになる。</p> <p>2 保育のねらい</p> <p>(10) 音楽に親しむ機会を豊かに与え、美しさを感じたり、感じた通りに自由に表現できる力を養う。</p> <p>3 望ましいおもな活動</p> <p>領域「健康」内「運動」</p> <p>(6) 音楽に合わせて、リズムカルに運動する。</p> <p>領域「音楽」</p> <p>(1) みんなといっしょに、静かな音楽を聞く。</p> <p>(2) 友だちの歌や演奏やリズムカルな動きを楽しむ。</p> <p>(3) 自然な声、はっきりしたことばで音程やリズムに気を付けて歌う。</p> <p>(4) 歌や曲を身体の動きで表現する。</p> <p>(5) 曲の速度や強弱に気をつけて楽器をひく。</p> <p>(6) 感じたこと、考えたことを、自由に身体や楽器で表現する。</p> <p>(7) 音や曲の感じがわかる。</p> <p>(8) リズムカルな集団遊びを楽しむ。</p> <p>(9) いろいろのすぐれた音楽に親しむ。</p> <p>4 指導上の留意事項</p> <p>(2) 入学への楽しみをじゅうぶんにもたせるようにするとともに、小学校の教育との関連を考慮すること</p> <p>(8) 表現活動の指導にあたっては、子どもの表現しようとする意欲を育て、うちから生み出されたものを受け入れてやり満足感と自信をもたせるよう留意すること。</p> <p>(9) 親母の言動は、子どもが美しいものを感じたり、よいものを選んだりすることに強い影響を及ぼすものであることに留意すること。</p> <p>↓</p> <p>(3) 次の各項に該当する歌曲を、カに示す共通教材3曲を含めて年間18曲以上歌わせる。</p> <p>ア 曲態は単音の歌曲(擬音擬声ふうの合唱を加えてもよい。)</p> <p>イ 調は長調、短調および日本旋法のもの</p> <p>ウ 拍子は2/4、3/4、4/4および6/8で、それぞれリズムの単純なもの</p> <p>オ 歌詞は原則として口語体で平易なもの</p> <p>カ 共通教材「かたつむり」「月」「日のまる」</p> <p>【D 器楽】</p> <p>(1) すずんで楽器を演奏しようとする意欲を育てる。</p> <p>ア 歌ったり聞いたりしながら、リズムによって楽器を楽しく演奏すること。</p> <p>イ ひとりで演奏したり、みんなで演奏したりする楽しさを味わうこと。</p> <p>(2) 器楽の基礎的技能を育てる。</p> <p>ア 打楽器を、その曲にふさわしい速さと強さに気づいて打つこと。</p> <p>イ オルガンで、簡単な旋律をひくこと。</p> <p>ウ ハーモニカで、簡単な旋律を吹くこと。</p> <p>(3) 打楽器による分担奏や合奏に親しませる。(略)</p> <p>【E 創作】</p> <p>(1) 即興的に音楽表現しようとする意欲と基礎的技能を育てる。</p> <p>ア リズムあそびをすること。</p> <p>イ ことばで歌ったり楽器を演奏したりして、ふしあそびをすること(日本旋法を含める。)</p> <p>ウ 打楽器で、フレーズを生かした分担奏をくふうすること。</p>	<p>教育目標</p> <p>音楽性をつちかい、情操を高めるとともに、豊かな創造性を養う。</p> <p>1 すぐれた音楽に数多く親しませ、よい音楽を愛好する心情を育て、音楽の美しさを味わって聞く能力と態度を育てる。</p> <p>2 音楽的感覚の発達を図るとともに、聴取、読譜、記譜の能力を育て、楽譜についての理解を深める。</p> <p>3 歌唱、器楽、創作などの音楽表現に必要な技能の習熟を図り、音楽による創造的表現の能力を育てる。</p> <p>4 音楽経験を通して、生活を明るくするおいのあるものにする態度や習慣を育てる。</p> <p>1. 目標 【第1学年】</p> <p>(1)鑑賞、歌唱、器楽、創作などの活動を通して、音楽的感覚の芽ばえをのばす。</p> <p>(2)音楽を楽しく聞こうとする意欲を育てるとともに、聞いたり演奏したりすることを通して、いろいろな楽器の音色や音楽の種類、演奏形態について興味と関心をもたせる。</p> <p>(3)歌ったり楽器を演奏したりする楽しさを味わわせ、創造的に表現しようとする気持ちを育てるとともに、歌唱および器楽の基礎的技能を養う。</p> <p>(4)即興的に音楽表現しようとする意欲を育てるとともに、そのための基礎的技能を養う。</p> <p>(5)音楽に対する愛好心を育てるとともに、愛好曲を身につけさせ、明るく楽しい生活ができるようにする。</p> <p>2. 内容【第1学年】 抜粋</p> <p>【A 基礎】</p> <p>(1)リズムに関する次の事項を指導する。</p> <p>ア リズムフレーズの拍の流れを感じとりながら、リズム唱やリズム打ちをすること。</p> <p>イ 二拍子系の拍子と三拍子系の拍子を、身体反応しながら感じとること。</p> <p>(2)旋律に関する次の事項を指導する。</p> <p>ア 2小節程度の旋律を聞いて、階名唱したり、楽器を演奏したりすること。</p> <p>イ 絵譜を見ながら階名唱すること。</p> <p>ウ 長調、短調、日本旋法の旋律を聞き分けること。</p> <p>エ 旋律の続く感じ、終わる感じを感じとること。</p> <p>(3)和声に関する次の事項を指導する。</p> <p>ア 長調の□、□の和音を聞き分けたり、分散和音唱したりすること。</p> <p>イ 長調の□、□の和音による和声進行の聞きとりをすること。</p> <p>【B 鑑賞】</p> <p>(1)音楽を楽しく聞こうとする意欲を育てる。</p> <p>ア 身体反応したり、旋律を口ずさんだりしながら、楽しく聞くこと。</p> <p>イ 旋律の流れによって、曲の気分ひたりながら、想像豊かに聞くこと。</p> <p>(2)打楽器(無音程および有音程)、バイオリン、ラッパ類、笛類、ピアノおよびオルガンの音色に親しませる。</p> <p>(3)聞いたり演奏したりすることを通して、次の音楽の種類や演奏形態について関心をもたせる。</p> <p>ア いろいろな種類の声楽曲(わらべうたを含める。)および器楽曲(描写音楽を含める。)</p> <p>イ ひとりの演奏とおおぜいでの演奏</p> <p>(4)次の各項に該当する曲目を、エに示す共通教材3曲を含めて年間8曲以上聞かせる。</p> <p>ア 明るく軽快な感じのもの</p> <p>イ 静かで旋律の美しいもの</p> <p>ウ なるべく種類や演奏形態の違うもの</p> <p>エ 共通教材「ガボット」「おもちゃの兵隊」「森のかじや」</p> <p>【C 歌唱】</p> <p>(1)すずんで楽しく歌おうとする意欲を育てる。</p> <p>ア 歌詞の内容を理解し、気持ちをこめて楽しく歌うこと。</p> <p>イ 自由な身体表現をしながら歌うこと。</p> <p>ウ ひとりでのびのびと歌ったり、みんなで声をそろえて歌ったりする楽しさを味わうこと。</p> <p>(2)歌唱の基礎的技能を育てる。</p> <p>ア 聴唱法で歌うこと。また、習った歌をなるべく多く階名模唱したり階名暗唱したりすること。</p> <p>イ きれいな声に気づいて、歌声に慣れること。</p> <p>ウ はっきりした発声で歌うこと。</p> <p>エ リズムや音程を正しく歌うこと。</p> <p>オ その曲を最も美しく表現できる速さと強さで歌うこと。</p> <p>カ 旋律のまとまりをとらえ、歌い出し、息つぎ、歌い終わりに気をつけて歌うこと。</p> <p>キ 伴奏をよく聞きながら歌うこと。↗</p>

【表6 昭和40年度保育指針と昭和43年度学習指導要領（第1学年音楽科）比較 共通点】

学習指導要領の比較からは、昭和33年度の比較の際と同様に、「身体表現」に関連した内容と、歌唱や器楽に関してわずかに共通した内容が見られる（表6 網掛部・傍線部）。しかし、教育要領と学習指導要領の比較の際に見られたような「基礎」に関する共通点は見受けられない。

(2) 昭和52年度以降の保育指針・教育要領・学習指導要領の比較

平成2年に初めて改訂された保育指針においても、教育要領と同様に音楽に関連する項目は領域「表現」の中で

示されるようになり、領域「音楽」と比べると、具体的な音楽活動についての記述が大幅に減少した。平成11年・平成20年・平成29年の改訂についてもそれは同様である（参考：巻末資料）。

教育要領と学習指導要領の比較について【表7】でまとめている。平成元年の教育要領と同様、平成2年度保育指針でも保育内容について示された章のそれぞれ「2ねらい」において、「感性を豊かにする」ことについて記載されている。また、教育要領の留意事項と同様に、保育指針の配慮事項においても、「表現しようとする気持ちを大切

年	教育要領・学習指導要領の特徴及び音楽に関する記載の共通点等
幼：昭和 39 年 小：昭和 52 年	<ul style="list-style-type: none"> ●幼小での共通した内容や言葉が非常に少なくなる ・身体表現について 幼：のびのびと動きのリズムを楽しみ、表現の喜びを味わう。 からだをのびのびとリズムカルに動かすことを楽しませるようにすること。 小：リズムフレーズの拍の流れを感じ取って、演奏したり、身体表現したりすること。 ・打楽器について 幼：カスタネット、タンブリン、その他の楽器に親しむ。 小：ハーモニカ及び打楽器に親しみ、簡単なリズムや旋律を工夫して表現すること。
平成元年	<ul style="list-style-type: none"> ●幼稚園教育要領の大幅な改訂により、音楽に関連する内容は領域「表現」へと移行した。 ●感性や心情に比重が置かれている 幼：「豊かな感性を育て」「創造性を豊かにする」ことが観点として掲げられる 小：「音楽に対する感性を育て、豊かな情操を養う」ことが目標として掲げられる ●観点や目標以外の具体的な音楽活動については、幼稚園の領域「表現」でほとんど触れられなくなったため、共通点した内容や言葉は見られなくなった。 ●教育要領の留意事項において、「生活と遊離した特定の技能を身に付けさせるための偏った指導を行うことのないよう」と述べられ、音楽的な技術中心の教育とならないよう明示されている。
平成 10 年	<ul style="list-style-type: none"> ●平成元年度に引き続き、幼小どちらでも感性や情操を豊かにすることが目標として掲げられている。 幼：「3 内容の取扱い」において、「自然などの身近な環境と十分にかかわる中で」美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会うこと、「生活の中で」幼児らしい様々な表現を楽しめるようにすること、「生活経験や発達に応じ」て表現を楽しむことなどが示され、身近な環境や生活に即した教育がより重視されている。 小：「リズム遊びやふし遊びなどを楽しみ」、「即興的に音を探して表現し、音遊びを楽しむ」こと、「音楽を聴いてそのよさや楽しさを感じ取るようにする」ことなどが前指導要領から追記されており、音楽遊びの活動を楽しむ中で情操を豊かにすることが目指された。
平成 20 年	<ul style="list-style-type: none"> 幼：平成 10 年度のものほとんど変化していない 「3.内容の取扱い」(3) で、「他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切にしてい」自己表現を楽しめるよう工夫することが求められた。 小：低学年の目標内で、領域「鑑賞」についても「基礎的な鑑賞の能力」を育てることが求められるよう示されたり、歌唱・器楽・音楽づくりの各活動において、「思いをもって」音楽活動をするよう示されたりした。また、「共通事項」を示し、「A 表現」と「B 鑑賞」の両方にまたがる音楽的な特徴や用語について、どちらの領域でも指導を行うよう示された。
平成 29 年	<ul style="list-style-type: none"> 幼：「3 内容の取扱い」の (1) と (3) に追記が見られる。(1) では「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにする」と追記され、豊かな感性を養うための身近な環境との関わりについて、より具体的にその内容が示されるようになった。 その他、教育目標やねらい、内容には大きな変化はない。 小：「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」が音楽科で育成を目指す資質・能力と規定され、低学年の目標も (1) 知識及び技能について (2) 思考力、判断力、表現力等について (3) 学びに向かう力、人間性等の 3 つの柱に沿った内容に整理された。 領域「A 表現」内の歌唱、器楽、音楽づくりや、「B 鑑賞」の各活動についても、「知識や技能を得たり生かしたりしながら」表現活動や鑑賞活動を行い、どのように表現をしたいのか「思いをもつ」よう示された。

【表 7 昭和 39 年度以降の教育要領と昭和 52 年度以降の学習指導要領（第 1 学年） 音楽に関する記述比較】

にし、生活と遊離した特定の技能の修得に偏らないように配慮する」ことが示された。なお、保育指針では平成 11 年度でも同様の記述が見られる（巻末資料波線部）。

平成 20 年度に保育指針が告示されてからは、領域「表現」の文言は教育要領とほとんど揃えられることになった。保育指針の「配慮事項」と教育要領の「内容の取扱い」にわずかな違いはあれど、「自然」との触れ合いの中で表現力が培われることが記されるなど、基本的な性格に大きな差異はないことがうかがえる。平成 29 年度保育指針では「内容の取扱い」も教育要領と揃えられ、領域「表現」はほとんどの内容が一致するものとなった。

4. 考察

これまでに出された全ての保育指針の内容から、小学校の連携に関する記述と音楽に関連する記述をたどり、その変遷を探ってきた。小学校との連携に関する記述では、昭和 40 年度・平成 2 年度・平成 11 年度の保育指針で、「小

学校入学への期待感」をもたせることについて、平成 11 年度・平成 20 年度・平成 29 年度では「生きる力の基礎」を育てることについて、それぞれ継続して示されていた。平成 20 年度からは保育所と小学校の連携についての具体的な連携の方法が示され、平成 29 年度には小学校就学時の具体的な姿として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されるなど、平成 11 年度以降は年々、保育所と小学校の連携や、円滑な接続への意識が高まっていることがうかがえた。また、昭和 40 年度で「6 歳児の保育内容」が「小学校に進学するまでに指導することの望ましい姿」だと示されていたものが平成 2 年度では見られないなど、記載される文量や内容の減少は多少見られるものの、初めて策定された昭和 40 年度から現在まで、継続して小学校との連携について考えられていることがうかがえた。

音楽に関連する記述は、昭和 40 年度の領域「音楽」内には、多少具体的な内容が見られるが、学習指導要領との共通点は多くは見られなかった。同時期の教育要領（昭和

39 年度) が、昭和 43 年度の学習指導要領で取り上げられる領域「基礎」と関連した内容について触れていることと比べると、保・小よりも幼・小の方が連携への意識がより高いものであることがうかがえた。平成 2 年以降、領域「表現」の中で音楽に関連する項目が示されるようになり、それに伴い具体的な音楽活動の記述が大幅に減少するのは保育指針も教育要領も同様であるが、「生活と遊離した特定の技能の修得に偏らない」ことについての記載は、保育指針(平成 2 年度・平成 11 年度)と教育要領(平成 2 年度のみ)で異なっており、保育所の方がより技術指導への偏向を問題視していたとも考えられる。平成 20 年度に保育指針が告示されてから以降は、領域「表現」の記載に保育指針と教育要領の差はほとんどなくなっていた。

教育要領と学習指導要領の比較からは、幼小の連携について①昭和期の教育要領では、幼稚園での教育と小学校の教育には一貫した目的と方法が必要だという考え方が示されていたこと、②平成 10 年度以降は教育要領と学習指導要領の双方で、幼小の連携や円滑な接続への記述が増加していたこと、③昭和 26 年度学習指導要領(試案)で幼小の系統的な目標や指導内容が示された後の教育要領(昭和 31 年度・昭和 39 年度)において、幼稚園での教育と小学校以降の教育が性格を異にすることが明示されていたことを特徴として挙げたが、今回保育指針の内容を精査することで以下のことが明らかとなった。

- ・昭和 30 年代初めまでの教育要領(昭和 23 年度・31 年度)では、幼稚園での教育と小学校での教育には一貫した目的と方法が必要だと示されていた。音楽科の教育内容についても一貫した指導目標や指導内容が見られた。
- ・昭和 40 年前後に同時期に出された教育要領(昭和 39 年度)と保育要領(昭和 40 年度)以降は上記のような「小学校教育との一貫性」については示されていない。
- ・昭和 26 年度学習指導要領(試案)で幼小の系統的な目標や指導内容が示された後の教育要領(昭和 31 年度・昭和 39 年度)では、幼稚園での教育と小学校以降の教育が性格を異にすることが明示されていたが、同時期に策定された保育指針(昭和 40 年度)では示されていない。また、小学校 1 年生との教育内容(音楽)を比較すると、教育要領の方が共通する内容が多かった。
- ・②で示された内容については保育指針でも同様の結果が得られ、平成 10 年度以降は幼・小、また保・小で連携や円滑な接続への意識の高まりが見られた。しかし、教科と領域の内容の比較からはそうした様子は見られない。

本研究では、学習指導要領・教育要領・保育指針に記載された文言のみを比較してその変遷をたどったため、今後は実際の保幼小連携の取り組みについて、具体的な取り組みについて探る必要がある。平成 10 年度以前と以降で保幼小それぞれの現場で連携に関する変化が生じたのか、実際の教育現場での意識や取り組みの変化について調査し、今後も音楽教育に関する保幼小の連携について探りたい。

【引用文献及び web 資料】

- 1) 三村真弓他「音楽教育における保幼小連携のための基礎的研究」『教育学研究紀要』第 50 巻、2004、pp. 267-272。
- 2) 岡林典子他「幼小をつなぐ音楽活動の可能性：京都幼稚園と京都女子大学附属小学校 1 年生の実践をふまえて」『京都女子大学発達教育学部紀要』第 10 号、2014、pp. 77-86。
- 3) 難波正明他「幼小をつなぐ音楽活動の可能性(2) わらべうた《らんかんさん》の実践から」『京都女子大学発達教育学部紀要』第 11 号、2015、pp. 11-20。
- 4) 岡林典子他「幼小をつなぐ音楽活動の可能性(3) 幼稚園・小学校での実践を教員養成に活かすために」『京都女子大学発達教育学部紀要』第 12 号、2016、pp. 89-98。
- 5) 岡林典子他「幼小をつなぐ音楽活動の可能性(4) 絵本を用いた「表現遊び」から「音楽づくり」へ」『京都女子大学発達教育学部紀要』第 13 号、2017、pp. 73-83。
- 6) 小林郁子「保育者・教員養成における保幼小連携のための音楽教育に関する一考察」『立正社会福祉研究』第 19 巻、2018、pp. 71-79。
- 7) 山下俊郎『保育所保育指針解説』、ひかりのくに、1965、p. 254。
- 8) 平井信義・高城義太郎・朽尾勲『保育所保育指針解説』、チャイルド本社、1990、p. 17。
- 9) 日本保育協会編『保育所保育指針の解説』、日本保育協会、1999、p. 7。
- 10) 前掲書 9、p. 26。
- 11) 厚生労働省編『保育所保育指針解説書』、フレーベル館、2008、p. 13。
- 12) 厚生労働省編『保育所保育指針解説』、フレーベル館、2018、p. 5。

【参考文献】

- ・中村三緒子「幼稚園教育要領領域「表現」の変遷に関する考察：小学校学習指導要領の影響を通して」『淑徳大学短期大学部研究紀要』57 巻、2017、pp. 61-72。
- ・岡本拓子・山浦菊子「日本の音楽教育における幼・小連続性の課題—幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の比較から」『聖和大学論集 教育学系』26 巻、1998、pp. 59-73。
- ・山内信子・持田葉子「幼小接続期における音楽表現活動の検討」『聖和短期大学紀要』2 巻、2016、pp. 63-71。
- ・山内信子「保育内容「表現」の指導に関する研究—幼稚園教育要領等の変遷に基づいて—」『聖和短期大学紀要』3 巻、2017、pp. 75-83。

平成 2 年度	平成 20 年度
<p>6 歳児の保育の内容より抜粋</p> <p>2. ねらい</p> <p>(15) 絵本や童話、視聴覚教材などを見たり、聞いたりして様々なイメージを広げるとともに、言葉に対する感性が豊かになる。</p> <p>(16) 身近な社会や自然事象への関心を深め、美しさ、やさしさ、尊さなどに対する感性を豊かにする。</p> <p>(17) 感じたことや思ったこと、想像したことなどを工夫して、目標を持って様々な方法で表現する。</p> <p>3. 内容</p> <p>「表現」</p> <p>(1) 様々な音、形、色、手ざわり、動きなどに気づき、感動したこと、発見したことなどを創造的に表現する。</p> <p>(2) 音楽に親しみ、みんなと一緒に聴いたり、歌ったり、踊ったり、楽器を弾いたりして、音色やリズムの楽しさを味わう。</p> <p>(3) 様々な素材や用具を適切に使い、経験したり、想像したことを、創造的に描いたり、作ったりする。</p> <p>(4) 身近な生活に使う簡単な物や、遊びに使う物を工夫して作って楽しむ。</p> <p>(5) 協力し合って、友達と一緒に描いたり、作ったりすることを楽しむ。</p> <p>(6) 感じたこと、想像したことを、言葉や体、音楽、造形などで自由に表現したり、演じるなど、様々な表現を楽しむ。</p> <p>(7) 自分や友達の表現したものを互いに聞かせ合ったり、見せ合ったりして楽しむ。</p> <p>(8) 身近にある美しいものを見て喜び、身の回りを美しくしようとする気持ちを持つ。</p> <p>4. 配慮事項</p> <p>「表現」</p> <p>(1) 表現しようと思うもののイメージが湧くような雰囲気をつくり、様々な材料や用具を適切に使えるようにしながら、表現する喜びを味わい、創造性が豊かになるように配慮する。</p> <p>(2) 子ども同士と一緒に活動する場合には、お互いに相手の立場を認め合いながら、協力し合って表現することの喜びを感じることができるよう配慮する。</p> <p>(3) <u>表現しようとする気持ちを大切にし、生活と遊離した特定の技能の修得に偏らないように配慮する。</u></p>	<p>保育のねらい及び内容</p> <p>オ 表現</p> <p>感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。</p> <p>(ア) ねらい</p> <p>① いろいろな物の美しさなどに対する豊かな感性を持つ。</p> <p>② 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。</p> <p>③ 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。</p> <p>(イ) 内容</p> <p>① 水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ。</p> <p>② 保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ。</p> <p>③ 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむ。</p> <p>④ 生活の中で様々な出来事に触れ、イメージを豊かにする。</p> <p>⑤ 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。</p> <p>⑥ 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。</p> <p>⑦ いろいろな素材や用具に親しみ、工夫して遊ぶ。</p> <p>⑧ 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。</p> <p>⑨ かいたり、つくったりすることを楽しみ、それを遊びに使ったり、飾ったりする。</p> <p>⑩ 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わう。</p> <p>2 保育の実施上の配慮事項</p> <p>(4) 3 歳以上児の保育に関わる配慮事項</p> <p>カ 自然との触れ合いにより、子どもの豊かな感性や認識力、思考力及び表現力が培われることを踏まえ、自然との関わりを深めることができるよう工夫すること。</p> <p>ク 感じたことや思ったこと、想像したことなどを、様々な方法で創意工夫を凝らして自由に表現できるよう、保育に必要な素材や用具を始め、様々な環境の設定に留意すること。</p> <p>ケ 保育所の保育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに留意し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること。</p>
平成 11 年度	平成 29 年度
<p>6 歳児の保育の内容より抜粋</p> <p>3. ねらい</p> <p>(15) 絵本や童話、視聴覚教材などを見たり、聞いたりして様々なイメージを広げるとともに、想像することの楽しさを味わう。</p> <p>(16) 身近な社会や自然事象への関心を深め、美しさ、優しさ、尊さなどに対する感性を豊かにする。</p> <p>(17) 感じたことや思ったこと、想像したことなどを、様々な方法で工夫して自由に表現する。</p> <p>4. 内容</p> <p>「表現」</p> <p>(1) 様々な音、形、色、手ざわり、動きなどに気づき、感動したこと、発見したことなどを創造的に表現する。</p> <p>(2) 音楽に親しみ、みんなと一緒に聴いたり、歌ったり、踊ったり、楽器を弾いたりして、音色やリズムの楽しさを味わう。</p> <p>(3) 様々な素材や用具を適切に使い、経験したり、想像したことを、創造的に描いたり、作ったりする。</p> <p>(4) 身近な生活に使う簡単な物や、遊びに使う物を工夫して作って楽しむ。</p> <p>(5) 協力し合って、友達と一緒に描いたり、作ったりすることを楽しむ。</p> <p>(6) 感じたこと、想像したことを、言葉や体、音楽、造形などで自由な方法で、様々な表現を楽しむ。</p> <p>(7) 自分や友達の表現したものを互いに聞かせ合ったり、見せ合ったりして楽しむ。</p> <p>(8) 身近にある美しいものを見て、身の回りを美しくしようとする気持ちを持つ。</p> <p>4. 配慮事項</p> <p>「表現」</p> <p>(1) 表現しようと思うもののイメージが豊かに湧くような雰囲気をつくり、様々な材料や用具を適切に使えるようにしながら、表現する喜びを味わえるように配慮する。</p> <p>(2) 子ども同士と一緒に活動する場合は、お互いに相手の立場を認め合いながら、協力し合って表現することの喜びを感じることができるよう配慮する。</p> <p>(3) <u>表現しようとする気持ちを大切にし、生活や経験、能力と遊離した特定の技能の修得に偏らないように配慮する。</u></p>	<p>3 歳以上児の保育に関するねらい及び内容</p> <p>(2) ねらい及び内容</p> <p>オ 表現</p> <p>感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。</p> <p>(ア) ねらい</p> <p>① いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。</p> <p>② 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。</p> <p>③ 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。</p> <p>(イ) 内容</p> <p>① 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。</p> <p>② 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。</p> <p>③ 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。</p> <p>④ 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。</p> <p>⑤ いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。</p> <p>⑥ 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。</p> <p>⑦ かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。</p> <p>⑧ 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。</p> <p>(ウ) 内容の取扱い</p> <p>上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。</p> <p>① 豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の子どもや保育士等と共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。</p> <p>② 子どもの自己表現は素朴な形で行われることが多いので、保育士等はそのような表現を受容し、子ども自身の表現しようとする意欲を受け止めて、子どもが生活の中で子どもらしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。</p> <p>③ 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の子どもの表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。</p>

【資料 平成 2 年度以降の保育所保育指針 領域「表現」内容一覧】